

## 2014 年度 山村再生担い手づくり事例集の作成について

‘14. 12. 19 豊田市矢作川研究所 洲崎燈子

### 【2014 年度の目標】

年度内に 21 の活動団体への聞き取りとレポート作成を行う。

### 【スケジュール】

- 1) 取材先の確定（～8 月末）
  - 2) 取材者の募集、確定（～9 月末）
  - 3) 取材者と取材先のマッチング（～10 月上旬）
  - 4) 取材（11～12 月）  
事前検討会 10 月 31 日（金）19：00～ 於・豊田市職員会館 3 階第 1 部室  
中間報告会 12 月 16 日（火）19：00～ 於・豊田市職員会館 3 階第 1 部室
  - 5) レポートの作成（～12 月末日）  
取材先によるレポート確認後、提出（～2015 年 1 月 25 日）  
振り返りの会 2 月  
交通費等の請求、編集会議、事例集の完成（～2015 年 3 月末）
- \*交通費等の計算・支払事務は豊田市の株式会社 M-easy 戸田友介代表が担当

### 【12/16 中間報告会の内容】

・これまでに 21 団体中 18 団体の取材が完了している。9 団体分の提出レポート（書きかけ含む）の読み合わせを実施した。

#### ・アンティマキ

代表者が京都から稲武に行きたいきさつを知りたい。何かを趣味でやることと、その講座を開くことの間にはハードルがある。どうしてできたのか。仲間がいたのか（唐澤）。よそものがいなかに住む時の心得についての返答がいい。うまくやっているのはバランス感覚がある人。いなかに移り住んだ人同士の交流は複雑に絡み合っている。どんなパンを作っているか、どんな植物を草木染めに使っているか知りたい。あと、稲武のどこがよかったのか知りたい（近藤）

#### ・てくてく農園

農産物のおすそわけスタイルは珍しい（洲崎）。ふつうは逆。基本に自給したいという思いがある（森本）。都会では食べていけないスタイル。岐阜で聞き取りをした時、「自立しているのは自分たち。都会には余ったものを提供する」という言葉を聞いた。プライドを感じた。「みんなで子育て」というのは？（近藤）。出産で家を離れるが、生き物の面倒を見てくれる人がいるということらしい。でも大変だと思う（森本）。儲けたいと思わないことがすごい（蜂須賀）。鶏の数は？（唐澤）100 羽（森本）

#### ・新盛里山耕流塾

団体の規模が知りたい（森本）。30～50 人で、コアメンバーは 5～6 人（蜂須賀）。財源は？（唐澤）

会費プラス市の補助金（蜂須賀）。講座、受講生、参加希望者の数とその変化が知りたい（長谷川）。講座は増えている（蜂須賀）。ある年の受講者が翌年には教える側に回ることや、この取組で耕作放棄地が減ったことにも言及してほしい（洲崎）。耕作放棄地率は80→30%に激減した。受講者の中からIターンが出てきて4組の家族が入り、地域の子どもが増えた。代表の鈴木さんが家などを世話した。これらのことも書く（蜂須賀）

#### ・近藤しいたけ園

原木しいたけの栽培だけでなく、ほだ木となる若い木を得るための林づくりもしていることも書いてほしい（洲崎）。ほだ木は自分の所のものが3割くらいで、あとは県内産のものでまかなっている（蜂須賀）。森の管理や栽培場所について知りたい。あと代表者の方にはおいしい食べ方も伝えてほしい（近藤）

#### ・こいけやクリエイト

「耕Life」は完成度が高い。設置場所が多い。流域の人に広く見てほしい。取材に当たった高橋さんは海部会なので、部会間の交流ができてよかった（長谷川）。人件費が持ち出しであることが課題ではないとしているのがすごい（蜂須賀）。デザイン会社がフリーペーパーを出す場合普通スポンサーがいるのだが、自前というところがすごい。最近フリーマガジンのコンテストで賞を取った（近藤）。「耕Life」のデザインはとても洗練されている。紙面作りのこだわりがあれば知りたい（洲崎）

#### ・アグロ・プエルタ

活動自体の形は？（唐澤）。農業サークルで、主に町の若い人に農業に親しんでもらうことをめざし、まちなかで農業やイベントをしている。メンバーは別にそれぞれ仕事を持っている。そうしたことも書いてほしい。ちなみに団体名は農への扉を意味するスペイン語の造語で、自分がつけた（洲崎）

#### ・じさんじょの会

萱葺屋敷という拠点を失い、今後どうするのか（蜂須賀）。皆、頭を抱えている。廃校になった小学校を使って「千万町楽校」を始めたが、公益性が高く活動が自由にできない（唐澤）。現在の活動についても書いてほしい（洲崎）。廃校を活用している足助里山ユースホステルの事例もある（蜂須賀）。結局お金が問題。イベントのリピーターは多く、移り住みたいという話も出たが、空き家が提供できずマッチングがうまくいかなかった。取材先に原稿を見てもらったら、少子高齢化は全国的な問題なので、ここは日本の最先端と話されていて、前向きな姿勢だと感じた（唐澤）

#### ・額田林業クラブ

全体的に長いので、それぞれのトピックの特徴を紹介する一言があるといい（長谷川）。熱気の感じられる力作のレポートだが、書式や文体など体裁を整えて。また、取材先と取材者の言葉を分けて（洲崎）

#### ・宮ザキ園

・額田がお茶の栽培に適した土地であるということをはじめて知った。土地や気象、消費者の好みにあったお茶づくりや新しい取組を模索していることがよく分かるレポートになっている。地域活

性化のための NPO を立ち上げているところもすごい (洲崎)

2014年度「山村再生担い手づくり事例集」取材先×取材者

取材先	取材者
木の駅ねばりん、菊の会、竹内牧場	* 沖章枝、松井賢子、浅田益章
グローバルハム、矢作川森林塾、矢作川水族館	* 山本薫久、國村恵子、田中五月
三宅林業、東幡豆漁協、佐久島もんぺまるけ	* 丹羽健司、洲崎燈子
アンティマキ、てくてく農園、あさひ若者会	* 蔵治光一郎、大島光利、森本徳恵
足助里山ユースホテル、新盛里山耕流塾、近藤しいたけ園	* 浜口美穂、蜂須賀功
こいけやクリエイト、アグロプエルタ、とよたプレーパークの会	* 近藤朗、高橋伸夫、真柄明洋
じさんじょの会、額田林業クラブ、宮ザキ園	* 今村豊、唐澤晋平、唐澤萌

\*はチームリーダー

## てくてく農園

調査団体名	: てくてく農園	団体代表者名	: 横江 克也
設立年	: 2011年	対応してくれた人の名前	: 横江 克也・横江 晴菜
団体URL	: <a href="http://www.hm.aitai.ne.jp/~yokoe/">http://www.hm.aitai.ne.jp/~yokoe/</a>	調査員	: 蔵治光一郎・大島 光利・森本 徳恵
活動拠点	: 豊田市榊野町池田26-4	レポート作成者	: 蔵治光一郎
取材日	: 2014年12月13日		

## 活動内容

農地を借り、野菜をつくる。鶏を飼い、卵を産んでもらう。不定期にジャムをつくる。これらを自家消費し、余剰を知り合いに「おすそわけ」する。おすそわけの方法は、決まったお客さんへの宅配のほか、インターネットでの購入申し込みも受け付けている。宅配は豊田市、瀬戸市内は自分で配達し、それ以外は宅配便で。名古屋や東京にもお客さんがいる。決まったお客さんは20~30人ほど。生産量としてはこれが限界。収入としては少し足りないが、生活はできている。

## キャッチフレーズ

おすそわけを食卓へ

## 会のモットー(何を大切にしているか)

生産、販売をするのではなく、あくまで、自分たちの暮らしの余剰分を、自分たちの暮らしを応援してくれる人に「おすそわけ」する。市場に出して、知らない人に売るのはすごく気をつかうこと。店頭で並べるのは大変。規格品は作りたくないし、作ることができない。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

基本は変わっていない。お客さんが20~30人になるまで、最初は口コミ、知り合いに分けていた。イベントに出展して宅配を募集し、お客さんが増えていった。野菜を先に始めたが、野菜は自分で作っている人も多い。卵は自分で作っている人は少なく、こだわりの卵を食べたいという人も多かったようで、増えていった。最近では、お客さんの顔が浮かぶようになり、こちらの思いだけでなく、お客さんのことを考えながら作るようになった。

## 連携している団体・専門家・自治体など

農協、スーパー、市の販売所とは連携していない。行政からは青年就農の補助金、耕作放棄地を再生する補助金、電柵の補助金などをいただいた。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

自分たちの生活で精いっぱいだが、消防団に入ったので、同じ世代で外から入ってきた人たちや、地元の若者とは知り合いになった。地域のお祭りに参加し、太鼓を習い、門松を作るなど、もともと好きだったので苦にならず楽しめた。草刈をするとありがたがられた。結果として、ほとんどの日曜日に予定が入っている。

## 現在直面している課題

提供できる量を増やしたいが、一人でやれることには限りがある。卵は好評だが、3~5月が旬で、1日90個ほど産む。その時はおすそ分けできる人が増えるが、それ以外の季節では1日20個ほどになり、欲しいという人に分けてあげられない。

## 今後やってみたいこと

研修生の受け入れ。自分たちのような暮らしをしたい人を受け入れたい。  
ヤギを飼ってみたい。やってきたことがあるが、草の好き嫌いがあってきれいにはならなかった。  
知り合いの農家さんとお互いに手伝い合いたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

研修生が1年限りで住める場所(ゲストハウスのようなもの)があるとよい。研修生に給料は払えないので、行政の事業で給料を払ってくれる制度があるといい。そのような制度はすでにあり、14万とか20万とかいった給料が払われるようだが、払い過ぎではないか、感覚がおかしくなってしまうのではないかと思う。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 地域に、どういう受入体制があれば、外からの人が、もっと入りやすいと思いますか。

<答え> 四国の研修センターにいて、暮らす場所を探していたとき、豊田市に空き家バンク制度があったのがとてもよかった。売り家でなく、借りられること、行政が間に入ってくれ、採算度外視であること(不動産業者との違い)、1日に何軒も見回れたこと。豊田の中でも旭の物件が多かったので活発な地域だと思い、旭を選んだ。農業については自分で農地を探した。技術は研修で学んでいたの、行政や農協の仲介はない方がむしろよかったが、ゼロから始める人に対しては研修先、面倒を見てくれる人がいた方が入りやすいだろう。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> お子さんが生まれた後の生活は。

<答え> 周りの人たちが「みんなで子育てすればいい」と言ってくれるので、安心している。母乳、布おむつで乗り切るつもり。小児科の病院は、大きなところは足助にあるが、近くにないか探している。子供が小学生になったときに地域の小学校(敷島小)がまだあるかどうか心配。農作業のマンパワーは、子育ての分、減ってしまうことになるので、お手伝いの方がいてくれれば助かる。子供が生まれることをきっかけに、やり方を変えた方がいいかもしれないと考え中。

## 写真



ご自宅での取材の様子

てくてくたまごはこの箱に入れて提供されます。中には「てくてく卵のひみつ」として①国産飼料100%②平飼い飼育③抗生物質不使用についての説明が書かれています。さらに「豆知識」として、「黄身の色は食べているものの色」として、てくてく卵の鶏のごはんはお米が中心なので、黄身が薄い黄色(とうもろこしやパプリカなど赤や黄色の強いものを食べると黄身がオレンジ色になる)で、昔庭先で飼っていた頃の卵はこんな色だったかもしれません、と書かれています。



# じさんじょの会

調査団体名 : じさんじょの会

団体代表者名 : 荻野昌彦

設立年 : 平成12年

対応してくれた人の名前 : 荻野昌彦

団体URL :

活動拠点 : 岡崎市 千万町 木下

調査員 : 唐澤晋平 唐澤萌

取材日 : 2014年11月15日

レポート作成者 : 唐澤萌

## 活動内容

地域に残っていた茅葺屋敷を整備しなおし主な拠点として活動。田植え、稲刈り、餅つきなど各種イベントの主催。イベントには名古屋、豊橋などから参加する人も多く、街の住人と地域住人の間に交流がうまれた。参加者には村民制度に加わってもらい、会費を徴収する代わりに年間のイベントに自由に参加できるようにしてリピーターを獲得。茅葺屋敷では地域の女性たちによる物販もあり、こんにゃく、五平餅などがよく売れた。それらは少なからず女性たちの現金収入となり、また、家に閉じこもりがちなお年寄りや女性が集まる良い機会になっていた。屋敷は宿泊施設としても開放していて、地域外の多くの団体が利用していた。その中の一つ、happypunchは今でも地域の畑を借りて週末農業をしており、他にもお祭や盆踊り大会などにも積極的に参加、地域のメンバーとして受け入れられている。

## キャッチフレーズ

つくりつづける、ふるさとづくり

## 会のモットー(何を大切にしているか)

和気あいあい 明るく 楽しく

## 設立から現在に至るまで変化したこと

2000年、千万町小学校廃校の危機感から、移住者人口の拡大を目的として茅葺屋敷での活動を始めた。2006年、岡崎市に編入。2014年、地主の意向で屋敷を返還することとなり活動の拠点を失う。また同時に、茅葺屋敷への来客数も頭打ちになっていたこと、そして小学校も廃校となったことにより、今、会の活動の転換期をむかえている。

## 連携している団体・専門家・自治体など

ふるさとづくり委員会、happypunch(農業サークル)、岡崎市、

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

活動内容に同じ

## 現在直面している課題

茅葺屋敷にかわる新たな活動拠点を作ること。(廃校になった小学校を利用する案も出ているが、市の施設なので活動に制約がかかってしまう。)メンバーの世代交代の時期をむかえていること。

茅葺屋敷では不十分だった、移住者人口を増やすための対策の強化。

地域が活性化しているとはどんな姿なのか。「活性化」そのものの共通認識の模索が、今一度必要。

## 今後やってみたいこと

茅葺屋敷での活動では移住希望者を獲得するまでは至ったが、その後様々な問題が表面化した。改めてマッチングの難しさに気付かされた。今後は新たな拠点で地場の食材を売ったり、イベントを開催することで地域のPR活動をすると同時に、移住希望者リストの作成と、空き家情報リストの作成し、その両者のマッチングを、より積極的にアプローチしていきたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

岡崎市の企画課 商工会 マスコミ 政治家

## チームオリジナルの質問

<質問内容>じさんじょの会の名前の由来

<答え>

じさんじょとは、絶滅危惧種であるヨシノボリの呼び名。集落を流れる川にたくさん生息し、極ありふれた生き物だったが、昭和40年代から環境の変化や川の汚染により30年近くにわたって全く姿を見なくなっていた。しかし近年また目撃されるようになった。このじさんじょの復活のように、地域を再び活性化させたいという思いが会の名前に込められている。また、語感も「地産」や「自然薯」などに通じて面白い。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>じさんじょの会を運営するにあたって難しかったこと

<答え>

平日、周辺の町へ働きに出ている住民も多い中、土日に集中して活動せざるをえないため、それを負担に感じる住民も一部いた。また、茅葺屋敷の運営を維持していく上でどうしても仕事を当番制にすることもあり、有志で始めた活動がいつのまにか義務化してしまい、報酬が出ないことへの不満が出たこともあった。

目に見える成果がすぐに出る活動ではないので周囲への理解が得にくいと同時に、自分たちのモチベーションを保つことも時に大変だった。

## その他、伝えたいこと

少子化、高齢化、過疎化、地域の抱える問題は山積しているが、どれもいずれは日本が全国的に抱える問題ばかり。その先陣を切っている、先駆者であることを楽しみたい。

写真

# 宮ザキ園

調査団体名	: 宮ザキ園	団体代表者名	: 梅村篤志
設立年	: 1820年頃	対応してくれた人の名前	: 梅村篤志
団体URL	: <a href="http://www.miyazakien.com/">http://www.miyazakien.com/</a>		
活動拠点	: 愛知県岡崎石原町	調査員	: 今村豊、唐澤晋平
取材日	: 平成26年11月17日	レポート作成者	: 唐澤晋平

## 活動内容

お茶の栽培(3ha)と、自社工場での加工、梱包、販売までを一貫して行っている。年間の生産量(製品の状態)は年にもよるが1600kg~2000kgくらい。地域に茶の生産者は50人くらいいて、委託加工や買取加工をしている。普段は家族5人で経営しているが、5月の連休明けくらいから夏までが茶の収穫期で、鮮度を失わないうちに一気に加工までするため寝る暇もないほど忙しい。1日1000kgの茶葉を順次加工し、製品としては200kgのものが出来る。その時期だけは地域の方にも手伝ってもらい、10人~15人くらいで作業している。お茶は全て有機無農薬栽培で、15年ほど前に県内で初めて有機のJAS認定を受けた。以前は農協に卸していたが、今は自社で産直や百貨店などに直接営業している。お茶にこだわる方が直接店に買いに来てくれる場合もある。

## キャッチフレーズ

- ・自然のままに
- ・People make a juice, God make the tea 人々はジュースを作り、神がお茶を作る  
工業製品とは違うので、同じものは作れない。一煎一煎の出会いを楽しんで欲しいという意味。

## 会のモットー(何を大切にしているか)

出来るだけ人の手をかけず、自然のままに仕立てていく。  
お茶は収穫したものがそのまま加工されて口に入るので、農薬や化学肥料は使いたくない。肥料も最低限のものしか与えないようにしている。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

おおよそ190年前に創業し、現在6代目。この地域は寒暖の差が激しく霧が良く出る自然環境でお茶の栽培に適しており、夏場は茶業、冬場は林業というスタイルが地域の生業となっていた。しかし昭和30年代に木材価格が下落し、林業が衰退したことでこの形態が崩れ、街に勤める人が増えて茶業も衰退していった。お茶の値段は下げ止まりの状態だが、ゆるやかに需要と供給が減ってきている。

## 連携している団体・専門家・自治体など

あいち三河農協、宮崎茶業組合、東海農政局、市役所、商工会など。  
6次産業化に取り組んでいるということで、行政からイベント出展などにお声掛けがかかることがある。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

地域に若い人が戻ってくることができるように、お茶という地域資源を活かして雇用を創っていくことを目指している。以前勤めていた茶業試験場の上司と紅茶の研究をしており、当時は珍しかった国産紅茶と一緒に作り、宮ザキ園のオリジナル商品として「三河わ紅茶」を開発した。当初はインドやスリランカから講師を招き入れダージリンやウバのような高級紅茶を国産で作れないかと思って試行錯誤したが残念ながらダージリンやウバはつけれない。しかし日本には四季がある。気候や風土などの条件も違う中で同じものを目指してもダージリンは作れないのだ。環境にあった収穫期や茶葉の発酵時間を調整し、日本の環境に合ったものにしようという方向性をシフトして、半発酵で日本人の口に合うような柔らかい味に仕上げた。

## 現在直面している課題

生産力不足。人手が足りない。収穫期に手伝いに来てくれるのも高齢者のみで、勤めている若い人はその時期だけ来てもらうということが出来ない。今年から青年就農の研修機関として認定を受け、研修生を受け入れると人件費の補助金が出るようになったので、担い手育成をしていきたい。

## 今後やってみたいこと

12月には紅茶の製造機械が納入される。地域の方には無料で貸し出して、オリジナルの紅茶を作り、訪れる人に地域を上げて紅茶でおもてなしをするという「紅茶街道」にしていきたい。  
また、茶の実を絞った油の商品開発を計画している。茶の実油は食用や美容用などで高級油として販売されている。寒い時期に葉を摘む「秋冬番茶」というものがあり、これも商品にしてみたい。冬季の仕事になればと思う。さらにお茶の文化をアメリカやヨーロッパなど、海外に発信していくこともやっていきたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

県や市、農協、農政局と連携しながら販路開拓を進めていく必要がある。

## チームオリジナルの質問

### <質問内容>

梅村さんは現在35歳とのことであまり同世代が地域にいないと思うが、後を継いで地域に残ることに抵抗はなかった？

### <答え>

同級生は12人いたが、今地元に残っているのは自分だけで寂しく思う。農業高校を出て、静岡で2年間茶業試験場に勤めて、そのまま後を継いだが、お茶を継ぐことが当然だと思っていた。これまで続けてきたものを守らなくてはという使命感をもっている。

## その他、伝えたいこと

2013年5月にNPO法人インディアンサマーを設立し、現在理事長を務めている。もともと額田のくらがり溪谷で音楽イベントを主宰していたNukata Sound Projectのメンバーが中心になって設立し、現在の会員は20名程度。

活動としては、サイクリングの楽しさを発信し観光地の活性化につなげる取り組みや、障がい者のために脳の活性化を促す音楽トランポリン療法イベントの開催、上記した三河紅茶街道の取り組みなど、地域活性化に想いのある有志が様々なプロジェクトを展開している。

団体名である「インディアンサマー」は、日本語で小春日和。冬に時々温かい日があることをアメリカでそのように呼ぶことにちなんでいて、地域経済を暖めていきたいという思いを込めている。

写真



宮ザキ園外観



商品のラインナップ。贈答用のパッケージもある。



茶畑の様子と梅村さん(右側)



わ紅茶のポスター。  
モデルは梅村さんの奥さん。